

幼児に対する保育者の援助

—— 観察事例による検討 ——

吉村智恵子

The Support of Children by a Kindergarten Teacher : A Case Study

Chieko YOSHIMURA

1. 目的

幼稚園教育における教師の役割は、幼児期の発達の特長や幼稚園教育の基本の趣旨を踏まえて次の4点が挙げられている(文部省,1989)。(1) 幼児を理解する: 共に生活する中で、幼児の発達の実状を的確に把握し、一人一人の幼児の特長や発達課題を捉えることであり、このことが、適切な指導を生み出すことにもなる。(2) 信頼関係を築く: 温かく見守り、共感、励ましを通して、信頼関係を築くことは、幼児を理解し、幼児の活動の援助を行うこととなる。(3) 環境を構成する: 幼児の生活の流れや発達などに即した環境を作り出し、環境を通して教育を行うこと及び教師自身の言動や姿勢が環境の中核として機能していることである。(4) 直接的な援助: 幼児が活動を通して着実に発達するのに必要な助言や指示(とりわけ承認、共感、励まし、アイデアを出す、手助けをする、相談相手になる)を行うことや必要とする知識、技能、態度などを獲得するための援助を行うことである。

上記のような役割を担った幼稚園教師が行う援助には、「理解」「見守り」「承認」「共感」「励まし」を始めとする様々な機能がある。幼稚園教師を含めて、一般に保育者は日常の保育の中でこれらの援助を複数の幼児を対象に行っていることになる。保育者が常にすべての幼児に対して意図的に援助を行うことは不可能と考えられるが、全ての幼児は保育者の援助を受けて育まれている。保育者の援助は意図的に幼児に向けられることもあり、あるいは無意図的な行動が多数の幼児に援助として受け止められていることもあり得る。保育者の意図的あるいは無意図的な援助が、幼児に働きかけられる様相を保育者と幼児双方から明らかにし、保育者の援助の意味について考えたい。

2. 方法

1) 分析資料

以下の方法により得た資料を分析対象とする。

① 自然的観察法(ビデオ記録及び行動描写記録)による保育場面記録

対象となる保育場面は、朝の登園後に自由な活動をしていて、保育者と幼児の関わりが見られた場面

② 保育後の保育者による内省の筆記録

③ 対象児に関する保育者の談話記録

2) 記録期間

1996年6月～12月の期間の12回、及び予備観察(5月に1回実施)

3) 対象

名古屋市内私立幼稚園5歳児クラス(男児12名、女児15名)

①担任保育者：女性、保育経験16年

幼児一人一人への対応や配慮がきめ細かい保育者である。

子どもたちとの遊びを楽しんだり、トラブルへの介入をしたりなどいずれも真剣に取り組む場面がよく見られる。

②R児(女児)：担任保育者(以下T)が「気になる子」として取り上げた幼児

R児についてTが気になる点(6月聴取)

新入園でなくても、新しいクラスになったときに緊張からうまく動けない子はよくいる。その殆どは、何らかの方法で「ほぐしていける」という見通しのようなものを感じるし、楽しい環境があれば変わっていくと思える。しかし、R児の場合異なった印象である。6月になっても気になっている。

特に、具体的に気になる点は、友だちとあまり関われないこと、困ったことがあったり、泣きたいことがあったりした時、ことばにうまく出すことができず「ウン」とかみ殺して泣く点である。

③S児・A児・M児(女児)：Tの近くによくいて友達との関わりもある幼児

保育者と幼児の関わりを見るため、1回目の観察で比較的保育者の近くで遊ぶ傾向のある女児3名を抽出した。

◎S児・A児は、3歳入園当初不安が高い傾向にあり、筆者が観察を続けている幼児である。(吉村・望月, 1997)

S児は、3歳児クラスでは特別な心の拠り所となるものを持ち歩いたり、指吸いが目立っていたが、4歳児では、少しずつ周りの幼児との関わりが増え、指吸いもなくなった。5歳児になっても、初めてのことに不安を示すが、Tへの確認を通して安定を図っている。

A児は、3歳児の時も4歳児になってからも、おかあさんごっこするときには「ネコ」の役ばかりをしていた。友達遊びを傍観していることも多かった。5歳児になって、友達との遊びも多様化しているが、「ネコ」になって、遊ぶことも多い。特定の幼児に命令されている場面が何度か観察される。

◎M児は、予備観察及び初回観察時に、Tのそばに特によくいる幼児である。

Tに対して、自分の気持ちを積極的に伝えており、R児と対照的な面が多く見られる幼児である。

3) 記録分析

観察記録の中から、Tの援助と対象児の変化を検討するのに有効であると考えて抽出した7エピソード及び、保育者の談話(3回分)を分析対象とする。

①抽出されたエピソードの分析内容

行動記録からTの援助の内容と対象児の行動を分析する。可能な場合は、保育者の内省を加えて、エピソード時の保育者の意図を明確にする。

②保育者の談話の分析内容

保育者の対象児に対する長期的な理解を談話から分析し、援助との関連を検討する。

3. 結果と考察

1) 観察記録によるエピソード分析

観察記録より、次のようなエピソードを保育者の援助と幼児の行動変化との関連を検討するための対象とした。

エピソード1 (6月11日午前10:15-10:25)

Tのそばで活動するA児, S児, R児, M児, 他児(C₁, C₂, C₃, C₄)

机の周りにTを囲むように数名で紙を使った製作をしている。

C₁はTに直接手を貸してもらいながら水族館づくりをしている。

C₂は離れた位置でままごとコーナーで遊びながらTだけを見ている

TとC₁のやりとりを見ているR児

C₃はTに折り紙の折り方を聞きに行くとTはC₃の問いかけに答えて、

「これはC₄君が得意だから、C₄君教えてあげて」と声をかける。

C₃とC₄が関わり合う。

S児は自分で活動しながら時々Tに報告に来る

M児は「先生、ホールで遊ぼう」と誘い、背にもたれたり、肩に触れながら

TとC₁の関わりや他の子どもたちを見ている

A児は、TとC₁の隣で製作をしている

観察者の考察

保育者を中心にネットワークが張り巡らされているような子どもたちとの関わりがあり、その中で、親密に関わりを持つ子どもと、離れたところから関わりを求める子ども、保育者から直接的あるいは間接的に働きかけを受ける子どもがある。

ここで行われている保育者の直接的な援助といえるものは、C₁に直接手を貸して水族館づくりをしていることと、C₃とC₄が関わり合うきっかけづくりの言葉がけをしているところである。他は、保育者の存在そのものや、他児との関わりを見ることを幼児一人ひとりが受け止めて何らかの意味を持たせているようである。

エピソード2 (6月21日午前9:30-9:50)

A児

Tが他児と話しているのを聞きながらTの洋服の背中の飾りを触る。

いつまでも遊びを開始しないで、Tの周りをうろうろしている。

Tが他のクラスの歯科検診のすすみ具合を見てくるように頼む。様子を見に行き、報告すると遊びへと移る。

M児

箱でコンピュータを作っていて、キーボードになる部分の作り方をTに相談し、テープを裏返して輪にして、両面テープとして使うことを教えてもらう。

作り終わると、Tのパズルの片づけを手伝う。

観察者の考察

A児は、Tとの関わりを求めている段階なのではないかと感じる。Tはそれを察して、A児に用事を頼み、頼まれたA児はその関わりした後、何かすっきりしたような表情になり、大きな声を出して他の女児と遊び始める。

Tの関わりがタイミング良く行われた。Tからの関わりをとっても必要としている時期なのではないかと考える。

M児はTとの関わりを楽しみ、そばにすることが好きというように見える。

担任保育者による内省

A児に特に関わりが必要と考えて声をかけたのではない。A児は割と早く登園し、Tと一対一でひとしきりおしゃべりをする朝が多い。そういった時間が、今朝はなかったせいかもしれない。特に遊び始めてないことを気にしてはいなかった。

M児は、活発に遊ぶ子である。最近私的なことで、TがM児の父親の職場を訪れたことを知り、親近感を感じているようである。

エピソード3 (7月9日午前9:30-9:40)

折り紙で遊んでいるR児は、Tが他児と話している声が聞こえるとそちらをじっと見て、また自分の活動へということをくりかえしている。

T : 「リボングループさん、おやすみしらべしてください」

R児 : 立ち上がり、C₅と手をつなぎ、Tのところへ行く。

R児、C₅、S児、M児の4人がTのそばへ集まる。

T : 「きょうのお休みは2人だね、言ってみて」

4人 : 「〇〇ぐみの△△です。きょうのおやすみは2人です」

職員室へ連絡に行き、戻ってくる。

R児は折り紙の続きをしている。

しばらくして、B児が登園してくる。

C₅ : 「せんせーい、たいへん、Bくんがきちゃった」

R児は腰を浮かしかけて、《どうしよう》という表情で、TとC₅を見ている。

T : 「じゃあ、お休みひとりになりましたって、言ってきて」

C₅ : 「うん」とすぐに保育室を出ていく。

T : 《どうしよう》という表情のままのR児の方を見て「Rちゃんも、行って行って!」と、わくわくさせるような語調で声をかける。

R児の表情がさっと笑顔になり、立ち上がり、C₅の後を追って走って出ていく。

観察者の考察

R児は、自分で判断して何か行動しなければならないときに、自信なさそうに動けずにいることがよく観察される子である。このエピソードでも、《どうしよう》という表情でいたが、Tの言葉掛けで動き出すことができています。

C₅は自分の思い通りにさっと動けるが、そのようにできず、ためらいがちなR児にはTの言葉掛けはタイミングのよい援助であったと考えられる。

— エピソード4（7月9日午前9：50－10：10） —

R児は遊戯室で縄跳び遊びをしている。長縄をもって回しながら反対側のコーナーでTが跳び箱を跳ぶ幼児の補助をしている姿を見ている。回す役を交替したら跳び箱の方へ向かい、並ぶ。

跳び箱までは助走できるが手を跳び箱にのせるだけでTに補助してもらっては、またぐことを繰り返し、徐々に両足一度に踏み切れるようになる。スキップして列に戻り順番を待つ。このときはぼんやりした表情。何度か繰り返し、少しずつ跳べるようになってくる。

Tが跳び箱のどの位置までお尻が載ったかを示して「すごい、すごい」と誉めたり、「次はここまでね」と目標を設定して励ます。R児は、跳び終えると、時々Tのお尻を触りながら後ろをぐるっと回り、列に戻る。

観察者の考察

TからのR児に対する積極的な関わりが見られた。直接的な援助（跳び箱補助）、賞賛、励ましなどである。それに対して、R児はTのお尻に触るという接触をしている。これまで、R児からTへの直接的な関わりを観察することがなく、かなり関係が深まっているように見える。

保育者の内省

体を動かすことはあまり得意ではないが、トランポリンや縄跳びなど跳ぶことは好きである。意識して跳び箱に誘ったりするようにしている。

— エピソード5（7月12日午前10：15－10：35） —

Tと数名で砂場遊びをしているR児

みんなで砂場で山を作り、トンネル掘りをする。他児（A児・M児を含む4名）はおしゃべりを盛んにしながら、トンネルも掘る。R児は、なかなか掘れず、近くにいる年下の幼児とその担任保育者（R児の前年度の担任）の方を見たりしながら上の空の様子である。

皆の穴が深くなってきた頃、TがR児の隣に行き、R児のシャベルを使って掘り方を説明しながら掘ってみせる。最後にみんなのトンネルがつながり手を触れ合わせて喜び合い、遊びは終わる。

観察者の考察

友達との関わりの増える砂場遊びにR児を誘うことは、R児にとってよい経験となる。特に砂山のトンネルで手をつなぐことは、他児との直接的結びつきができ効果的である。Tの直接的関わりは「遊びに誘う」「掘り方をみせる」という点にあったが、他児とTとのやりとりを見ていることが、R児にとっては間接的働きかけとなっていた。

担任保育者による内省

砂場でのトンネル掘りは「楽しい」ので誘った。深い意図があったわけではない。他の幼児は、本当によく話をし、遊びを楽しんでいる。

R児は「掘り方」もまだよく知らない様子であったので、やってみせた。

— エピソード6 (10月4日午前9:25-9:50) —

観察者が入室すると、折り紙遊びをしていたR児はすぐにニコツとして手をそっと振ろうとする。友達の作ったお手本を見ながら折り紙を作り上げ、鞆のところへ入れに行く。途中Tが、他児の手形取りをしているのをのぞき込み、周りにいる友達と顔を見合わせてニコツと笑う。

片づけの後、好きな子同士でテーブルの周りに腰掛けることになり、椅子をもってぐるっと見回し、S児を見て近づいていき声をかけて隣同士で座る。

観察者の考察

友達とのつながりが増えてきているようである。保育者のやっていることにはいつも関心を持ってみているが、今回も通りがかりに保育者が手形取りをしているのを見て、その楽しさを他の友達と共有して笑い合う場面を見ることができた。

— エピソード7 (11月8日午前10:20-10:35) —

Tが他児と製作をしている。R児はTの近くで牛乳パックを使って、製作をしている。Tと他児の様子をチラッと見ながら、自分の手元を動かしている。

Tが「Rちゃん、ハサミ貸してくれるかな」と声をかけ、R児は自分の使っていたハサミをTに渡して使い終わるまでTを見ている。

観察者の考察

R児がTの様子を見ていることが増えているが、R児の方から接触を求めたりすることは少ない。このエピソードでは、Tが意図を持ってR児に声をかけ、R児の周りへの関心を促すきっかけとしていると考えられる。

担任保育者による内省

R児は、大好きな製作遊びの中で自分のやりたいことをしている。直接Tとの関わりを求めてくることは少ないが、ハサミのことは、あまり特別な思いをもって働きかけたわけではない。

2) 保育者のR児に関する談話

保育者と観察者とのR児に関する話し合いの中から、その日の観察内容から離れて語られた保育者の談話を以下に示す。

6月の談話から

新入園でなくても、新しいクラスになったときに緊張からうまく動けない子はよくいる。その殆どは、何らかの方法で「ほぐしていける」という見通しのようなものを感じるし、楽しい環境があれば変わっていくと思える。しかし、R児の場合異なった感じである。6月になっても気になっている。

具体的に気になる点は、友だちと関われない、困ったことがあったり、泣きたいことがあった時、ことばでうまく発することができず「ウーン」とかみ殺して泣く。

親は、習い事をたくさんさせているが本当の力になっていないような気がするし、もっと何か足りないものがあるように思う。

4月から、クラスの中でうまく力が発揮できていない子や仲間関係などがスムーズにいけない子にそれぞれ関わってきた。今、一番気になるR児に、夏休みが始まるまで、特に意識して関わって行ってみたい。

7月の談話から

運動遊びが苦手なR児であるが、ピョンピョンとぶトランポリンなどは好んでいる。そこで縄跳びへ誘うことを最近続けていて、少しずつ跳べるようになってきている。

R児からTにもとめてくる関わりは少ない気がする。

R児は自分より年少の子へはよく関わろうとしている。

11月の談話から

M児、S児らと朝から約束して、お昼ご飯を一緒に食べるといったこともあり、一緒に食事する友だちもでき、友だちとの関係が徐々に広がってきて、少し安心してきている。

まわりの子どもたちは、R児といっしょのグループになれたりするとみんな喜ぶ。R児から関わることはほとんどないのに不思議である。

笑顔も増えたが、R児の気持ちがまだつかめない部分がある。自分（T）との関係が悪いわけではない。お互いの関わりも増えてきている。

親との関係においても、他の親は一步入れれば話し合える気持ちのつながりがあるが、R児の親とのつながりに壁がある感じが強く、そのあたりに難しさを感じている。特に母親は園へ来ることがなく、懇談会も父親が出席し、母親の気持ちがつかめず、とっかかりがない。

談話の流れ

談話の主なテーマをまとめると以下のようなようになる。

R児について気になること



体を使って遊び関わること



友達関係の拡がりやTとの関係



親との関係についての困惑

R児について周りの人との関わりの薄さ、表現の乏しさを気にかけて、どのような関わり方をしていけば良いかの模索を続けている中で、言葉を使うより体を使って遊び関わることを意識して援助していることが最初に語られる。保育者自身の援助と共に、友達関係の変化についての読みとりがされ、うまく関われる友達が作られていくことが語られている。この拡がりを、観察者は、保育者の周りにいて、人との関わりを求めている幼児あるいは表現豊かな幼児たちが、保育者のR児に対する肯定的な受け止め、配慮を感じ取り、R児を自然に自分達の関係の中へと取り込んでいる。保育者と良い関係を結んでいる幼児の力が働いているように感じ取った。

保育室の中のできる限りの援助を行いながらR児の変化をみながら、保育者は親のことについて語るようになる。保育者と対象児、他の幼児と対象児の関係がある程度うまく行き始め、その子が少しずつ自己を発揮し始めているときに、さらに一步進めるためには、家庭での関係等他の要因に配慮が及び始める。そのようなときに、保育者自身が親に働きかけにくい状態があったり、親からの情報が得られにくい場合、保育者は困難感を感じている。保育において親との関係の重要性を考えさせられるのはこのようなときである。

3) 考察

エピソード記録と保育者の内省、及びR児に対する談話を分析し、次の点が明らかになった
①エピソード1, 2でのR児以外の幼児との関わりから、保育者は幼児からの多様な要求に的確に応えていることが分かる。

例えば、M児の「保育者と一緒に活動したい気持ち」とか、A児の「何か自分と保育者の関係を確認したいような気持ち」といったものに対してである。R児の場合は、その気持ちをつかみにくい印象を保育者は持っているが、エピソード3では、自分の気持ちをどう表現すればよいか分からずにいるときに、保育者は、かなりタイミングの良い援助をしている。また、友だちとの関わりが少なさが気になっていることの反映としての保育者のR児への関わりが、エピソード5, 7で見られた。しかし、保育者はすべて意識化して行っているわけではなかったことが、内省により明らかになった。観察者の推察は、保育者の対象児に関する談話を参考にして、意図を読みとった上で行っていたが、日常の保育の中では保育者には意識化されずに行われていた。保育者自身は、無意識であるがその理解の方向に逆らわないような投げかけを的確に行っていたのである。

②保育者はR児との関係性の中で、うまくいっている感じやR児にとってよい状況であるかどうかといった理解を言語化している。

対象となる幼児の行動を一つひとつ分析的に見るのではなく、R児の状態そのものをとらえようとしたり、クラスの中での友達との状態を視野の中に十分取り入れている。観察者は対象児のみに目を奪われがちで、他の幼児の行動の意味もR児にとってどのような意味のあることかというように分析しようとしたり、保育者の行動を対象児との関係の中で意味づけ、保育者の援助と対象児の変化を因果関係的に読み取ろうとしていたこととは対照的である。

このことは、保育者と親密な関わりを持つS児やM児がR児とのよい関係を築いていったことや、まわりの幼児がR児に対して好感を持っていることにも、現れている。保育者はクラス全体の関わりの中で、状態をつかんでいるため、自然な流れの中でR児に有効に働く無意識的な関わりを、他児を通じて生じさせたり、R児に対する気持ち育てていたと考えられる。

③R児の変化についてまとめてみる。

人との関わり点では、他者の様子を見るということを頻繁にしながら、保育者の誘いかけや他児とのやりとりを増やしつつ、関係を深めていった。特に、R児の他者への働きかけにはぎこちなさがよく見られ、声も小さいことからうまくやりとりができないことも多かった。しかし、自分より年下の幼児や観察者などかなり受け入れ態勢のよい相手を選んで関わり、徐々に安心感をもって他者と関わる方向へと進んでいった。周りの様子を見るだけだったのが、後半には、友達と笑いあって楽しさを共有したり、保育者へのさり気ない接触を試みたりという変化が見られた。

④R児への援助を、保育者はある程度の方角付けをもって行っていることが分かった。しかし、保育者の談話の中で、親とのつながりについて述べられている部分では、R児のことについて方角付けを親と共に確認できないことへの困惑が感じられる。

幼児について、親と話し合う中で、保育者が幼児に対する関わりは何らかの確信を得たりすることができることも、自信を持って保育を続けていくために大切なことである。

4. まとめと課題

保育者が行う援助は、幼児が直接的あるいは間接的な形で発する要求に的確に応えており、

幼児に対する保育者の援助

要求が積極的に出ないR児のような場合には、その気持ちをつかみにくい印象を持ちながらも、保育者の側から、必要な働きかけを盛んに行っている。しかし、保育者はこれらの行動をすべて意識して行っているわけではなかったことが、内省により明らかになった。

保育者の援助の中には、保育者自身が存在しているだけで幼児が自発的に受け止めている援助もある。保育者と他の幼児との会話ややりとり、座っている保育者の背中への感触などが、幼児の次の行動を促進する場合が見られた。この保育者の存在することによる援助といえることは、保育者と幼児との間に良い関係が作られているときに働いているようであった。逆に言えば、関係性の安定感がない場合、保育者は積極的・直接的な援助を幼児に向けて発していくことが必要になるということである。

意識化して言語にした場合には、保育者が幼児をどのようにとらえているかを第三者（ここでは観察者）も同様に理解しているつもりである。しかし、保育の場の中で展開される保育者の援助は、言語化されていない部分で幼児と保育者が作り上げている関係性に支配されているように考えられる。通常一般に使われている言葉で、子どもの様子を説明した場合、その説明から分かることと、実際の関係性を含んだ幼児の捉え方は、別のものを示している場合があったということである。

幼児をとらえると言うことは、表面的な行動の説明だけでなく、保育者の関わり方を全て決定するものでもない。対象の幼児のどの部分に視点を合わせ、どうしてあげたいと思っているかは、保育者が、幼児との間にどのようなつながりを感じ、何をしているか、そして親との間で確信を得ることができているのかどうか、関わっていることが分かった。

保育者は問題点を重視して日々の関わりを決定することよりも、日々の関わりの中で変容を見定めようとしている。

本研究では、保育者が幼児にどのように援助し、関わっているかを探ることを通して、保育の中で行われていることの一部を明らかにしようとした。

そこでは、幼児との関係性がどうなっているかという視点に関わる部分が重要であり、保育者が幼児の一つひとつの行為をどうとらえていくかが問われるところである。特に、幼児が何もしていないことを保育者はどのようにとらえているのか、さらに検討する余地がある。

また、子どもの自発性を重んじた保育を目指すには、「幼児と幼児」の関わり、「幼児」からみた「保育者理解」ということも、保育中の人間関係において見定めて行くべき点である。

文 献

引用文献

文部省(1989) 幼稚園教育指導書 増補版

吉村智恵子・望月久乃(1997)幼稚園入園当初の幼児の不安とその後の経過. 日本発達心理学会第8回大会, 101.

参考文献

Kontos,S.(1992) *The role of continuity and context in children's relationship with nonparental adults*. In R.Pianta(ed.), *Beyond the Parent: The Role of Other Adults in Children's Lives*, Jossey-Bass. 109-119

Lewin,G (1977) "In-Between Times" in the Kindergarten, Study Centre for Children's Activities

Lewin, G. 著, 石垣恵美子訳(1996) もうひとつの幼稚園. 相川書房

佐木みどり・大場幸夫(1996) 幼児の仲間入り行動と保育者の援助(3) - 保育が変容したことでE子の仲間入り行動が変容していく過程. 日本保育学会第49回大会. 816-817

- 志賀智江(1988) 幼稚園教育における「幼児理解」の研究－その1子どもサイドに立った幼児理解について－. 青山学院女子短期大学紀要. 42. 75-98
- 志賀智江(1996) 幼児理解を促進するための教師教育プログラムの開発と試行(2)
-インサ-ビス段階における教師の幼児理解の発達を基盤として-. 乳幼児教育学研究. 5 43-53
- 杉村伸一郎・桐山雅子(1991) 子どもの特性に応じた保育指導－Personal ATI Theory の実証的研究. 教育心理学研究 39-1. 31-39
- 津守 真(1987)子どもの世界をどうみるか－行為とその意味. NHK ブックス.
- 津守 真(1997)保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－. ミネルヴァ書房. 288-289